

「西表島古見の伝統文化の調査研究」を終えるにあたって

波照間 永 吉

沖縄県立芸術大学附属研究所が西表島古見の伝統文化の調査研究に取りかかったのは1991年である。6年間古見の地を訪れ、古見の人々が持ち伝えた伝統的な文化の端々に触れてきたわけである。プーリィの調査に限っていうと、研究所の調査以前に私個人で行った調査を含めると10年を超える。その始まりから、古見の方々の知己を得られたことはまことに幸いであった。大底朝要氏、新本定男氏、新盛基代子氏の懇切な導きは、古見のユムチンガンを中心とするプーリィを継続的に調査することの必要性と可能性を示してくれた。その後何度か古見を訪ねるうちに、古見の伝統文化の全体を調査・記録し、研究するというプロジェクトを実施したいという希望が湧き、研究所のこの調査が出発することになったのである。

それにしても、古見との因縁は深かったと思う。私事になるが、高校2年生の時、友人ら5名で西表島を西から東へ横断するという、ほとんど暴挙に近いことをした。キャンプ行の1日目の夜が明けて最初に見たのは、寝床としていた岩盤の穴に落ち、必死に這い上がろうとしているハブであった。2日目の夜には、今し方降ったばかりの雨水が鉄砲水となって、寝床にしていた川床を押し流していくという危難に遭遇した。そして、3日目は大雨とヤマヒルの襲撃の中、寒さに震えて古見岳の山中を歩き続けた。途中、雨に打たれ飛ばなくなったカムリワシの巨大な立ち姿を目撃し、驚いた。こんなに大きな鳥を見たことがなかったからである。ようやく、4時頃であろうか、人の住む村に出てきたのであるが、今はそこが村のどの場所であったか、分からない。確か、人里に出て、救われたような気持ちになったことを覚えている。その人里が古見であったのである。

1988年3月、春休みを利用して御嶽調査で西表島に渡った。祖納、星立での調査を終えバスに乗り、古見で下りた。まだ寒さが残っていて、どんよりとしていた。20年ぶりの古見であった。畑でヘラを使っている老婦から話を

聞いた。御嶽の話。神職の話。古見の昔の話などなど。優しく、穏やかな口調であった。この方が、その後の私の古見調査を助けてくれる冨里サカイさんであった。

こうして私は古見に近づいて行った。そのうち、古見の保持してきた文化の意義とその全体像に思いを巡らし、そして過疎の中であえぎながらも、先祖伝来の祭儀を途絶えさせるまいと、必死に取り組んでいる人々の姿を見るにつけ、古見の伝統的文化の営みを記録に残す必要性を痛感するようになっていった。小さい故にその本質がよく見えるということがある。古見の伝統祭祀を追求することによって、八重山の祭祀文化の原質的なものが明らかにされるのではないか。古見の伝統文化のありようは、八重山の伝統文化の今後を考える上で原基となるものを提供しているのではないか。言語・民俗・芸能・生産活動、これらの総体を記録し、研究する。特定地域の文化を研究するためには当然のことである。このように考えると、古見の伝統文化の調査研究は、私一人の力では如何ともしがたいものとしてあることは明らかであった。そこで私は、附属研究所の地域文化の調査研究事業として「古見の伝統文化の調査研究」を行うことにした。

調査研究は人文科学を対象として、言語、文学、歴史、民俗、芸能の領域に限ることとした。それに応じて、調査団を次のように組織した（所属・肩書きは事業執行時）。

言語 加治工真市（沖縄県立芸術大学教授・附属研究所所長）

文学 波照間永吉（沖縄県立芸術大学附属研究所教授）

歴史 新城 敏男（石垣市史編集室長）

小野まさ子（前原高校教諭）

芸能 大城 學（沖縄県教育庁文化課専門員）

森田 孫榮（石垣市史編集委員）

民俗 赤嶺 政信（琉球大学助教授）

現地協力者 大底朝要（石垣市職員）

新本定男（沖縄電力職員）

この陣容で、調査・研究を展開した。例えばこれを私個人に関してみると、組織的調査に入る前を含めて、次のように古見を訪れている。

1986年7月29日	豊年祭の調査
1988年7月27・28日	豊年祭の調査
1990年8月5日～7日	豊年祭の調査
1991年7月31日～8月2日	豊年祭の調査
1992年1月23・24日	種取り祭の調査
1992年3月6・7日、13日	二月マチィリィ、二月ユーニガイの調査
1992年7月25日～27日	豊年祭の調査
1992年9月5・6日	結願祭の調査
1993年7月29日～8月2日	豊年祭の調査
1993年10月9・10日	結願祭の調査
1994年7月25日～27日	豊年祭の調査
1994年10月1日	結願祭の調査
1995年7月20日～22日	豊年祭の調査
1996年8月2日～6日	豊年祭の調査

この間の調査で特に印象深いのは、20年近くも途絶えていた豊年祭のトゥーピィのフナクイの儀礼を、故次呂久弘起氏、大底朝要氏、田房敬助氏、故大底博氏らのご好意によって、復元してもらったことである。そのとき、シルシバタを持って舳先に立った少年の次呂久忍君も、今やウイタビをおえ、立派なヤマニンジュとなっている。また、この調査がきっかけとなって、中断していた結願祭の主要な祭儀であるウカウツカン（請原御嶽）での芸能の奉納が9年ぶりに復活し、その後継続されるようになったことも、うれしいことであった。

しかし、このように足繁く古見に通い、多くの方のご好意を受けながら、どれだけのことができたか、はなはだ心もとないものがある。本報告書には、紙幅（予算）の都合でご覧の数の報告しか掲載できなかつた。歴史学、民俗学の調査研究担当者による論文の他、私個人にしても、二月マチィリィ、二月ユーニガイ、タニドゥリィ、そして、古見の地名についての報告は載せられなかつた。いつの日かこれらの報告を含めた、より豊かな報告書を提出したいと思う。加治工教授の古見方言の研究は継続されているし、大底氏の、郷里古見の伝統文化の掘り起こしはいよいよ佳境に入りつつある。これらを

総合する一書をまとめることが次の課題である。

この間の調査には森田孫榮氏をはじめとして、調査員の先生方や沖縄県立芸術大学の学部および大学院の学生が同行した。学生諸君にとっては、神と共にある芸能の生きた姿に触れる最高の場面であり、また、民俗調査の現地研修の場でもあった。大挙して押し寄せ、かつ秘儀の部分の多い祭りを見学するという、私たちの仕事にご理解を示し、ご協力たまわった古見の皆様にご心からお礼申し上げます。そして、いつも優しく見守ってくださった富里サカイ司、吉峯セツ司、仲本セツ司、ティジィリィベーの山里寅吉氏、仲本芳雄氏に深く感謝申し上げます。また、豊年祭の調査に対して、ご理解たまわったウヤ、ギラムヌはじめヤマニンジュの皆様にも感謝申し上げたい。そして、この調査研究の組織の一員として、調査研究に従事すると共に、多大の便宜をはかってくださった大底朝要氏、新本定男氏にもあらためてお礼申し上げたいと思う。また、本報告書の編集・校正でご協力たまわった田場由美雄氏にもお礼申し上げます。

なお、私たちの計画に対し、一番最初の段階から暖かいご理解を示して下さい、いろいろお助けくださった次呂久弘起氏、山本哲男氏、大底博氏のご三名の方がお亡くなりになられたことは返す返すも残念なことである。ご三名がお元気のうちにこの調査研究のご報告ができなかったことが今更ながら悔やまれる。ご三名のご冥福を祈りつつ、この報告書を捧げたいと思う。

(1998年3月15日記)